

帝都モノガタリ

『暗黒の太陽』

本シナリオの内容は虚構である。

現実のいかなる人物、団体、その他のものと一切の関係はない。

本シナリオでは大正という時代、文化を扱っている為、現代において差別的な表現となるものが含まれていることがあるが、差別の肯定、助長する意図は決してない。

『暗黒の太陽』

the Sun of Darkness

「神なんてのは結婚式と葬式の時以外は無用のモンだ」

「そうしちまったのは人間だがな」

——— たがみよしひさ『アフリカの太陽』より

はじめに

本シナリオはラブクラフト・ミステリーTRPG『Kutulu』に対応したシナリオである。1~4人のPC向けにデザインされており、プレイ時間はPCの作成を含めずに2~3時間程度となる。

本シナリオは大正時代である為、本来の『Kutulu』が想定する舞台と異なるが、基本のルールは同一である為、PCの背景情報以外に困ることは無いだろう。

本書では、以下のように省略した用語を用いる。

PL=プレイヤー

PC=プレイヤーキャラクター

NPC=ノンプレイヤーキャラクター

GM=ゲームマスター

LV=能力値や専門知識のレベル

また、パッシブ能力値、専門分野がnレベル以上あれば情報が得られ場合、『<(能力値、専門分野)>nLV:得られる情報』のように記載する。

シナリオのスペック

舞台設定: 1920年代、日本、帝都東京

推奨人数: 1~4人

プレイ時間: 2~3時間程度

推奨: 中流層以上のPC

その他:

PCは、シナリオに登場する九鬼真、吾野誠一との友人になる

トレーラー

震災後の帝都東京。

暗いニュースが世間を彩る中、貴方は銀座のカフェ『アントライオン』で開かれる、友人の婚約祝いに参加する。

しかし、その席で婚約をした二人は殺害される。混乱した場で、朦朧とした意識の中、貴方は奇妙な呟きを聞く。

そして、続く事件の中でも、貴方は同じ囁きを聞くことになる。

GM 向け情報

シナリオの概要など、GMが事前に読む内容である。

シナリオのプレイにあたって

シナリオは大正末期、昭和初期、震災後の帝都を舞台としていることを想定している。それ以前、以降でプレイする場合、GMは適宜、シナリオ中の年代や帝都の様子を変更すること。

本シナリオの改変・加工は自由である。GMは自分にあったやり方に変更する、その場の都合で修正するなど全く問題ない。

むしろ、積極的にシナリオを自分や、対象とするPL、PC向けに変更した方がやりやすいだろう。

各場面で入手できる情報は能力値、専門技能を記載しているが、GMは自由に変更して構わない。GM

はシナリオが停滞しないように、あるいはよりドラマチックに展開するように心がけよう。

シナリオでは帝都の地名が多く登場する。可能であれば地図を用意して説明するとよいだろう。

また、GMが適宜、場所などを変えていくのも問題ないが、内容に矛盾などに気を付けること。

シナリオの概要

PCは、銀座のカフェ『アントライオン』に吾野誠一、矢作亜哉子の婚約祝いに参加する。その席で二人は殺害されるが、朦朧とした意識の中で奇妙な呟き『支配の呪文』を聞く。

婚約祝いに参加していた人物を調査していくと、淀川美乃、能代享、栄和真示と『支配の呪文』によって関係者が殺害されていく。

PCは事件を追っていくうちに『支配の呪文』の使い手、『暗黒の太陽』の使徒である『黒き民』となった能代麗と対峙することになる。

シナリオの背景

シナリオの背景にある情報である。真相に関わる部分である為、GMはよく理解して欲しい。

『暗黒の太陽』

『暗黒の太陽』はイゴローナクの化身である。アフリカの名前も認識されていない少数部族によって崇拜されていた(正式な名称が呼ぶと神が自身に降臨してしまう為に、『暗黒の太陽』と呼ばれている)。

黒い彫像は『暗黒の太陽』をかたどったものであり、その依代となっている。彫像の頭は破損しているのではなく、もともと存在しない。

この彫像を手にして『暗黒の太陽』に祈るか、あるいはその存在を知らずとも強い憎悪、恐怖などの負の感情を持つことで神から『支配の呪文』を受けられる可能性がある。

それは同時に『暗黒の太陽』の使徒、『黒き民』となることを意味している。

『黒き民』は『暗黒の太陽』の望む恐怖、憎悪、墮落を世に広めることを目的としているが、まず自身の欲望を充足させようとする。

『暗黒の太陽』の下僕『黒き民』

『暗黒の太陽』に恐怖や憎悪などを捧げることで、その下僕となった者どもである。

己の欲望のままに生きることを強要され、本人の意思とは関係なく快楽を追求し、それが満たされることなく常に飢えた状態となる。

『黒き民』が『暗黒の太陽』に捧げる供物は、人々の恐怖や憎悪などの負の感情である。

『支配の呪文』

『暗黒の太陽』が『黒き民』に授ける呪文である。

その名の通り、短時間の間、対象を自由に操ることが出来る。相手の意識は失われ、たとえ自殺や殺人のような行動でも躊躇せず行わせる。

この呪文は『暗黒の太陽』を部族ぐるみで信仰していたアフリカの少数民族の言葉で唱えられるが、『黒き民』となったものや、狂気が深度4.適応に達している場合は、その言葉の意味を知ることが出来る。

「目覚めよ、今こそ解き放たれん。

我は汝の意識なり。汝は我の意識なり」

PCの作成時

実際のプレイの開始の前に、PC同士の関係は決まっていることが望ましい。

PCの作成の段階で、事件の冒頭、「銀座のカフェ『アントライオン』に吾野誠一と矢作亜哉子の婚約祝いに行く(吾野誠一側の友人として)」ことを告げて、取得した(あるいは、する予定の)専門技能など絡めて、吾野誠一との関係や、事件にどうか関わっていくか、どう興味を持つのかを決めておく。

PCは、NPCの九鬼真、吾野誠一とは大学の関連での友人であるとする(少なくとも婚約祝いの場に呼ばれるだけの親しい関係である)。

シナリオのフローチャート

シナリオの基本的な流れは以下のようなものを想定している。

GM や、PC の動きによって順番が変わり、想定する狂気の深度などが異なる可能性に注意して欲しい。



登場人物

シナリオに登場する人物を紹介する。

特に能力値、技能などは記載しないが、必要に応じてGMが持っている/持っていないを決めればよいだろう。

吾野誠一(あがの・せいいち)

ディレクタンディズム溢れる素人の翻訳家であったり、通訳であったりした。

大学時代に九鬼真と友人になり、PCとも顔見知りである。

もともと墮落した生活を送っていたが、同じ快樂主義者の栄和真示の甘言に乗って能代麗と関係を持ったことで『黒き民』となる。

能代麗の下僕のような存在になっていたが、矢作亜哉子との関係に区切りをつける為に結婚を選んだが、結果、麗に『支配の呪文』によって殺害される。

矢作亜哉子(やはぎ・あやこ)

華族の末娘で、蝶よ花よとお姫様のように育てられた結果、明るく社交的だがわがままで気まぐれ、浪費癖のある快樂主義者となった。

もともと華やかで頹廢的な生活を送っていたが、栄和真示と関係を持ったことで『黒き民』となる。

彼とずるずると関係を続けつつ、吾野誠一とも付き合いはじめ、表向きだけでも関係を清算しようと結婚を試みたが、能代麗の『支配の呪文』によって殺害される。

栄和真示(さかわ・しんじ)

芝で輸入代理店を経営しており、矢作家の出入りがある為、亜哉子と知り合っている。九鬼真とも大学時代の友人である。

店で輸入した海外の雑多な雑貨の中に『暗黒の太陽』の彫像を発見し、『黒き民』となった。その後、『支配の呪文』を駆使して自由で墮落した生活を謳歌していたが、より『暗黒の太陽』に適合した

能代麗と交わり彼女が『黒き民』となったことで、彼女にひざまずく。

麗と共犯関係であったが、邪魔になった為に『支配の呪文』で殺害される。

淀川美乃(よどがわ・よしの)

矢作亜哉子と同じく華族の娘だが、落ち着いた雰囲気のお嬢様然としたお嬢様。

矢作亜哉子と吾野誠一と出会うまでは墮落とは無縁の生活を送っていたが、二人に弄ばれて『黒き民』となり、頹廢的な快樂浸りとなっている。

能代麗の正体を知る者として、『支配の呪文』で殺害される。

能代麗(のしろ・うらら)

大学教授である能代享の娘で、物静かな目立たない古風な女性であるが、父親の影響から学問に興味を持ち、並の学者以上の学識の持ち主である。

事件の黒幕。栄和真示と交わったことで『黒き民』になる。『暗黒の太陽』はより悪意、邪悪に満ちた精神を持つ人間を好む為、真示から司祭の資格を受け継ぎ、『支配の呪文』を自由に使うようになっている。

事件は単純に麗にとって憎悪の対象、邪魔となった人物を『支配の呪文』で順次消していつているだけである。

九鬼真(くき・まこと)

PCの友人の書生崩れの物書きで、大学時代から吾野誠一や栄和真示と友人関係である。

親が多少裕福である他は、特にこれと言った才能も特技も無い平凡な男である。

大学の卒業後は帝都に残る為、作家の元でなんとなく書生奉公しているようなもので、作家になりたいと強く思っているわけではない。

誠一、真示からは人が好いマヌケなヤツと思われており、今回の婚約祝いにしても当たり障りのない人選である。

大学時代から教授の娘である能代麗に惚れているが、たまに研究室で顔を合わせている以上の関係ではない。

能代享(のしろ・あきら)

早稲田大学の言語学者で、能代麗の父親である。

幼い麗に言語学の素養を見出して英才教育を施した結果、彼女は若いながらも父親を越える才能を発揮するも、この時代に女性の学者は難しく、それ以前に大学への入学すら認められていなかった。

表向きの親子の関係は良好だが、娘は父親を強く恨み、憎悪している。

吾野誠一の情報を漏らしそうになった為に、麗に『支配の呪文』で殺害される。

導入部：

探索のきっかけ、PCが事件に巻き込まれる場面となる。

登場するNPCと親しいことを強調しつつ、実際の探索が開始されるまであまり時間を掛けずに進めてしまっても問題ない。

『アントライオン』での婚約祝い

震災後の帝都、昭和初期の銀座からシナリオは始まる。

帝都は震災から復興が順調に進んでいるが、不景気に加えて軍国主義の暗い影が覆い始めている。

銀座もまた復興によって人出が増えたことも確かだが、大阪方面から流れ込んだエロサービスを中心としたキャバレーが目立つようになった。

そんな中、裏手にあるカフェ『アントライオン』は震災前の営業形態を守り、居心地の良いカフェとしてPCの落ち着いた場となっていた。

今日はその2階の個室を借りて、親しい友人だけが集まって吾野誠一と矢作亜哉子の婚約祝いをする事になっている。内々の小規模なお祝いと言えども聞こえはよいが、誠一、亜哉子の二人はともに遊び人であり、招待する人間を厳選した結果がこれだというのが実際のところだ。

PCと九鬼真は誠一側の友人として招かれている。

亜哉子が誠一を殺害する

最初はぎこちなかったものの、会場は誠一と亜哉子と酒によって盛り上げられ、ほぐされて、弛緩した雰囲気が漂い始める。

夜も更けてきてそろそろ解散かと思ったそのとき、何かをぶつぶつ呟きながらふらりと亜哉子が立ち上がった。

GMは下記の描写をいきなり行うこと。PLがとまどうかもしれないが、そのまま続ける。

誰かの悲鳴があがった。

そこには、首の無い誠一と思われる死体が転がっていた。その前には首に刃物をあてた亜哉子が立っていた。

もう一度悲鳴が上がる。

首の無い死体の上に、血しぶきを上げながら亜哉子が倒れこんでいた。

そこへお手洗いやから戻ってきたと思われる能代麗がその光景を目撃し、また悲鳴が上がった。

ここで狂気の深度1.否認が適用されている。

亜哉子は『支配の呪文』によって精神を支配され、店にあった肉切り包丁で誠一を殺害、その後同じ刃物で自殺をした。

同じく誠一も『支配の呪文』によってまともな抵抗が出来ない状態であったこともあって、これらはごく素早く行われた。

彼女らの口から漏れる『支配の呪文』はクトゥルフ神話の事象である。その為、その場に居たPC、NPC達に狂気の深度1.否認を引き起こし、呪文を唱えながら起こった誠一の殺害場面の記憶がPCから失われたのだ。

翌朝、警察署の前

PCは朝方、警察署の前に立っていることに気が付く。隣には同じく幾分疲れた様子の九鬼真が立っている。

朦朧とした意識の中、『アントライオン』から警察署へ連行されて取り調べを受け、解放をされたことを思い出す。

はっきりと思いだせるのは、首の無い誠一の死体とそれに折り重なった亜哉子だった。彼女が死んでいる確率は高いが、はっきりとは思い出せない。

ここから実際の探索が始まる。

PLが探索に慣れていない場合、GMは九鬼真を使って探索対象のヒントを出すと良いだろう(PCが一人の場合などは、彼を相棒扱いすると面白いかもしれない)。

最初は具体的に指示をしても構わない。PLが慣れてきたら九鬼はヒントを出す、情報をまとめて方向性を示す、漏れを指摘するようにすればよい。

真は能代麗に惚れている。その為、この事件に彼女が関係あるのかどうか知りたいとも思っている為、積極的にPCに協力する。

探索部

実際の探索が開始される。

PCの行動を制限するものは無いが、銀座から近い順に調査を進めると効率がよいことを、九鬼真を使ったり、実際の地図を示したりして相談するとよいだろう。

矢作亜哉子の生死

PCが周辺人物や警察から矢作亜哉子の生死を確認した場合、やはり彼女が『アントライオン』の2階で死亡していることが確認できる(警察に確認した場合は、その認識が無いことが不審がられるが)。

この件は華族である矢作家への配慮によりまだ報道されていない為、一般情報としては流通しておらず、関係者のみが知るところである(そして、PCは関係者なので教えてもらえる立場である)。

亜哉子が死亡していることを確認したPCは、事件の夜の彼女の最期を思い出す。誠一の首を切り落とした後、彼女も自身の首を斬り落とそうとしたのか、首に肉切り包丁を当てて死んだのだ。

誠一を殺害したのは、あの男は有名な遊び人であり婚約が決まった後に何か重大な瑕疵が発覚した

か、逆に彼女自身も遊び人であるので何か問題があって殺害を決意したのではないかとと思われる。

あの晩に、二人の間で何かあったのではないかと予測される。

<名声>、<家格>1LV：社交界の知人や、『アントライオン』の店長などから矢作亜哉子の放蕩ぶりは銀座界隈では有名であり、今回の婚約でやっと落ち着く気になったかと言われていた。相手の吾野誠一も浮名を流している人物であったが、まさか結婚する前から事件が起こるとは誰も考えていなかった。

<心理学>1LV：事件当時の彼女の行動は異常としか言いようが無く、何かぶつぶつと口走っていたことから心神喪失状態だったのではないかと予測できる。ただ、首を切り落とすと言う異常行動については強い意志を持って行ったものであるはずだが、何故かは分からない。動機や当日あったことなどが分かれば推測できるかもしれない。

亜哉子が誠一を殺害し、自殺をしたことは『支配の呪文』によって精神を操られたせいである。表向き、彼女と彼は婚約するまでの仲ではあるが、同時に邪魔であるとも感じていたことは確かだ。だが、動機や、当日の出来事が分かったとしてもその行動との整合性は取れない。

婚約祝いの参加者

あの場に居た人物については、当日、二人から紹介されていることもあり、PCは思い出すだけでよい。参加者は以下の通りで、簡単なプロフィールも思い出す。

➤ 吾野誠一

通訳や翻訳などを生業としていた。天涯孤独の身だが、親の遺産により遊んで暮らしているようなもので、いわゆるディレタントである。

➤ 矢作亜哉子

華族の娘。末っ子気質で我儘、奔放な性格だが、その美貌と実家の財力、権力で遊び暮らしている。当然だが働いておらず、社交界にもたまに顔を出す程度で、銀座界隈では女王のように言われていた。

<名声>1LV：矢作家は片田舎の華族だったが帝都に出てきて商売と政治の両方で成功を収め、以降堅実路線に切り替えて今の不景気な世の中も上手く渡っている。

➤ 栄和真示

亜哉子の友人。若いながらも輸入業を営む、現代と言うならばベンチャー企業の社長のようなものである。矢作家へ出入りがあり、そこで亜哉子と親しくなった。

<信用>1LV：栄和の経営する輸入代理店は有能な番頭によって堅実な経営がされており、銀行などの評価もよい。

➤ 淀川美乃

誠一と亜哉子共通の友人で、亜哉子と同じく華族の娘。亜哉子とは女学校時代に、誠一とは彼が大学時代に通訳の仕事を通じて知り合っている。見た目はおっとりとしているがインテリ系。

➤ 能代麗

誠一の友人。誠一と真の大学時代の恩師の娘。冷淡で人付き合いが悪く、今回の参加者の中では謎が多い。父親である能代亨の助手的な立場である。

➤ 九鬼真

誠一の友人で、PCとも友人関係。書生崩れの文士見習いで暇人。大学時代に誠一と意気投合して友人関係になったという。

一般情報以外の情報を得るには本人に当たるか、関連する場所へ行って聞き込みなどをする必要があるとPCには告げること。

表面的にはパーティの参加者の半分は初対面ということになっているが、真を除いて全員がすでに何らかの理由から顔を知っており、真を除いた男性は亜哉子、麗と、女性は誠一、真示と肉体関係を持っている。

確証は無かったが、彼らが顔を合わせたことで直感的にそうであることに気が付いている。あるいは、亜哉子と美乃などは前々から気が付いており、妙な雰囲気ではあったのだ。

また、意外と友人の友人である人物が多い。

吾野誠一を調べる

PCは友人である吾野誠一の住所を知っている。彼は盛り場の近くに居を構えるように、帝都の各地を転々としていたが、現在は京橋にある震災後に建てられたモダンなアパートを借りて住んでいる(銀座からは徒歩で移動可能な範囲だ！)。

彼の部屋を訪ねると無人であり、鍵が掛かっている。<機械工学>1LV以上あれば開錠できるが、PCの手段に合わせてパッシブ能力値を使用してアパートの管理人に鍵を開けさせることも可能だ。

部屋はモダンな洋間で、一人暮らし向けの1LDKのような構成になっている。彼は通訳と翻訳業を営んでいて、仕事場兼用になっているリビングには物書き机が置かれており、机上はいうに及ばず、床にまで資料や書類が散乱している。

部屋の中には事件後、誰かが立ち入った形跡は見つからず、部屋を散らかしたのは誠一自身だと思われる。

家探しをすれば(特にどこを調べるなどの指定は不要)、物書き机の上に他の書類と異なりミミズがひねくったような文字で描かれたメモ書きを発見することが出来るが、このメモ書きを読むことはできない。文字かどうかも怪しいように思える。PCはひどくこのメモに引き付けられる。

そのメモを押さえるように置かれているのは、人型をデフォルメしたような彫像で、全身が黒く、民族色豊かな装飾が施されている。破損しているのか頭が無くなっている。

また、この彫像は部屋にそぐわない調度品であることに気が付く。

メモはひどく乱れてはいるものの、間違いなく吾野自身によって書かれている。意識が朦朧としていたのか、急いでいたのかは分からない。

彫像はアフリカの少数民族の民芸品に似ている気がする。正確には分からないが、何らかの宗教的なシンボルでは無いかと思われる。

<犯罪学>1LV：この部屋は事件の前後で誰かが立ち入った形跡はなく、発見できる痕跡も誠一と思われるものだけだと分かる。事件とは無関係で、証拠ら

しい証拠も見付からないと断言できるが、発見したメモと彫像は何かに関係あるかもしれない。

誠一のメモ『支配の呪文』

誠一の部屋で入手するメモには『支配の呪文』が書かれているが、狂気の深度によって理解できる内容が異なる。狂気の各深度での理解内容は以下の通りになる。

0. 全く読めない。文字にすら思えず、落書きか試し書きの線の塊にしか見えない。
1. 全く読めない。そもそも文字かどうか分からない。
2. 読めない。意味の無い記号の羅列のように見える。
3. 読めない。理解できないが、何らかの文字であり、読むことができるはず。
4. 読める。これは『支配の呪文』である。

『支配の呪文』は、アフリカの少数部族独自の言葉で、以下のようなものだ。

「目覚めよ、今こそ解き放たれん。我は汝の意識なり。汝は我の意識なり」

この呪文は頭の無い黒い神『暗黒の太陽』によって、その下僕『黒き民』にもたらされたものである。『暗黒の太陽』への祈りの言葉であり、悪意を持って対象を害する場合にのみ使用できる。

この呪文を使用すると対象の意識を乗っ取り、短時間だが自由に操ることが出来る。その間、相手の記憶はなく、自殺などの行動も抵抗なく起こす。

PCがこのメモを見た場合、<言語学>が無いが、狂気の深度が1以下の場合、ミミズがのたくったような意味不明な文字にも記号にも見えない線の集合体にしか見えない。

<言語学>1LV：(狂気の深度によって読めるようになった後)既知の言語体系に含まれているかも怪しい。詳細は専門家に委ねるしかない(3LV 必要だと分かる)。

<言語学>3LV：(狂気の深度が不足している場合でも、専門的な知識によって何らかの文字を見出す)非常に興味深い言語であると思われ、調査には時間が掛かるが、おそらく何かの祈祷の言葉ではないだ

ろうか。民俗学や宗教学の観点から検討してみるとよいかもしれないが、まず読めないと話にならない。

PCが3LVの専門知識を備えていない場合、有識者を頼るとよいことをアドバイスしよう。PCの職業や、<名声>、<信用>などの筋から紹介、あるいはもともとの知り合いなどとする。

3LVある場合でも、複数の専門家からの意見を求めるという意味で、有識者を頼るということにしてもよいだろう。

頭の無い黒い彫像

この頭の無い黒い彫像は『暗黒の太陽』をかたどったものである。頭部が破損しているのではなく、もともと存在しない。

PCがこの彫像を手にとって調べた場合、以下の様なことが分かる。

彫像は素朴な機器を使って彫り込まれており、塗料で黒く仕上げているのではなく、長く人手に渡り、磨き上げられるように黒くなっており、表面はつるつるで、木目も見当たらない程である。

この彫像からは微かに生臭い血のような臭いがする。

<医学>1LV：彫像の黒さは手垢だけではない。臭いからも分かるように、これは血やそれに近いような分泌物が何重にもなっているこの黒さになっている。

<考古学&歴史学>1LV：彫像はアフリカの古い民族のものであり、その歴史ある文化を担っているものであると思われる。

<人類学&民族学>、<考古学&歴史学>3LV：この彫像は確かにアフリカの、いわゆるブラックアフリカの工芸品の特徴を備えているが、既知の民族のものとは一致しない。未知の部族のものである可能性が高く、しかもこの精巧さから彼らにとって重要なものであったことは間違いない。

悪夢を見る

PCが探索を開始した後、夜を迎えるか、あるいは探索が素早く進んだ場合は移動中の白昼夢となる。

導入部で狂気に触れて深度 1.否認を発症しているPCは幻覚の深度 1.ドリームとして悪夢を見る。GMは以下の描写を行うこと。

暗い部屋の中、そこはおそらく『アントライオン』の2階の、事件のあった部屋だ。

部屋の中心、誠一と亜哉子が死んだ場所にはっきりとは分からないが、極端に猫背になっているのか、首が無いような姿に見える人に似た形の黒い影が立っている。

先ほどから聞こえてくる低く、聞き取りにくい囁き声はそいつが発しているようだった。

その囁き声は、亜哉子が最後に口にしていた呟きに似ているような気がする。

夢の中だが、PCは自ら行動が出来る。

そのまま『アントライオン』の2階から立ち去った場合は夢から醒める。

部屋の中を調べた場合、そこが事件の起こった部屋で間違いなく、二人が死んだ様子が再現されることが分かる。

黒い影に近づいた場合、そいつに首が無いことが分かり、夢から醒める。

PCが夢から逃げたい、と考えた場合も同様に夢から醒める。

この悪夢は『支配の呪文』を聞いたが為に起きている。つまり、PC、NPC全員に起こる(タイミングはまちまちだが)。

この夢が示唆するのは、亜哉子が口にした『支配の呪文』がクトゥルフ神話的な事象であることと、PCが狂気に蝕まれ始めていることである。

淀川美乃を訪ねる

このシーンは、『悪夢を見る』より後に行う必要がある。PCがまだ悪夢を見ていない場合、移動中の仮眠で見る夢か、白昼夢を見たことにする。

PCが淀川美乃に事件の聞き込みへ赴く場合、彼女は御茶ノ水にあるモダンなアパートに一人暮らしをしている(もちろん、家賃等は全て親に出してもらっているが)。

彼女の部屋の扉をノックするなどしても反応は無く、扉にも鍵が掛かっていない。扉を開けたら、GMは以下の描写を行う。

これは狂気の深度 2.模索が適用されている。PCは事態が正確に把握できない為、描写は可能な限り淀みなく、無遠慮に押し付ける。

部屋の中には淀川美乃が立っている。

部屋の中には頭の無い黒い影が立っている。

前に夢の中で見たそいつはやはり何かをぶつぶつと呟いていた。

淀川美乃は何かをぶつぶつと呟いていた。

黒い影には頭が無いが、声が聞こえる。

美乃の声には、同時に誰か別の声にも思える。

滑るように黒い影が動くと、淀川美乃もそれに重なるように動いた。

淀川美乃は黒い影のように滑るように歩いて部屋を出て行く。

しばらくすると、部屋の奥にある窓から彼女がさかさまに落ちていくのが見える。

そのとき、やっと彼女と目が合った気がした。

部屋の中には、『支配の呪文』によって精神を拘束された美乃がおり、その光景を目撃したPCは狂気の深度を深める。そして、事態を正確に把握できないままに彼女の自死を目撃することになる

美乃が投身自殺したことにより、すぐさま警察などが呼ばれPCがその場に残っていた場合は事情聴取を受けることになる。

警察が来るまでの短い時間ではあるが、彼女の部屋を家探しすることは出来る。

警察が来る為に不自然な痕跡を残さないように調査を行うと、彼女と誠一が男女の関係にあり、亜哉子とはそれで表向きはともかくもめていたことが分かる。

やや強引だが常識的な判断をすれば、誠一と亜哉子の婚約に続けてあの事件によって絶望して自殺した、と考えられなくもない。

部屋には特に不自然なところはない。自殺の直前だったというのに、不自然なぐらいに事件の痕跡が何もない。

<犯罪学>1LV：彼女の物書き机の引き出しに隠された日記を発見する。中には誠一と真示を含めた複数の男たちとの、墮落した、頹廢的な愛欲の日々が書かれており、彼女を知る者にはまるで妄想のような内容に思える。日記を子細に検討すれば本当かどうか分かるかもしれないが、これを持ち出せば警察にあらぬ疑いを招く可能性が高い為、そのまま置いていくことになる。

栄和真示を訪ねる

栄和真示の商店は新橋に事務所を構えている。訪ねていくと忙しく働いている人々を見ることは出来るが、真示は不在である。

番頭などに話を聞けば、彼は例の事件以降、姿を見せていないことが分かる。それだけでなく、連絡も取れていないので逆に PC に何か分からないか聞かれる始末である。

噂では番頭が有能だということだったが、真示と連絡が取れずにおろおろとしており、とてもそうは思えない。番頭の話では、彼はある時期から強引に商売を進めるようになり、その指示が不思議と当たるようになったという。

その中には取引先が急に態度を変えたり、まず無理だと思われたような交渉も上手く行ったりなど、彼の辣腕ぶりが発揮されたと言う。

PC が女性(矢作亜哉子、淀川美乃、能代麗)について確認した場合、具体的に誰とは分からないが真示がそれらしい複数の女性と親密な関係であったことを語る。

<弁舌>1LV：栄和真示の女性関係のだらしなさは商店側の人間も認識している。彼の所在がつかめないのはいつものことで、女のところを渡り歩いている為、芝にある自宅にはほとんど居ない。彼は老若、身分に立場を問わず、時には他人の恋人、人妻であっても平気で関係を持つ。最近に限ったことではないが、ほとんどの場合に複数人の女性と関係を持っている。

黒く輝く太陽

この場面は、淀川美乃を訪ねてその死を目撃したことによって、狂気が深度 2.模索に到達したことで起こる。

PC が移動時など、外に居る場合に以下の描写を伝える。

太陽が陰ったように思えたが、空には燦燦と黒い太陽が輝いていた。

その黒い光を受けて辺りが暗く見えるのだ。

貴方の前を歩く、道行く人々はどこか気だるげに、だらしなく口元を緩めているように見える。

だが、そこから上は太陽の光を受けて黒く見えており、どのような表情をしているのかは分からなかった。

貴方が持ち歩いている黒い彫像から、笑い声が聞こえた気がした。それはくぐもって密やかに、しかし、いやらしい笑いだった。

PC には幻覚の深度 2.キメラが起こっている。狂気が夢から現実には到達し、それを侵蝕しつつあるのだ。

今度は悪夢や白昼夢ではないことをそれとなく伝えること。

有識者を頼る

有識者を頼る場合、九鬼真が能代教授のところへ行こうと言う。

能代享は早稲田大学に籍を置く言語学者であり、誠一、真の恩師であり、麗の父親である。

ちなみに大正期、早稲田大学は東京府多摩郡戸塚村にあり、東京市外だった。

能代教授はいつも通りに PC を出迎えてくれる。PC が真が「麗さんは？」と聞くと、例の事件でショックを受けているようだったが、今日は大学の手伝いに来ていると言う。

丁度、教授の部屋の扉が開き、お茶の入った湯飲みが載ったお盆を手に、麗が戻ってくるが、PC や真に気が付くと「ああ、皆さん。お茶を淹れてきますね」と、湯呑を教授の前に置くと、再び出て行く。

能代教授に『支配の呪文』が書かれたメモを見せると、「これは……、何が書かれているのかね？」と不審げな顔になる。

狂気の深度2に達していない場合、このメモはまともに読めないミミズののたくった文字のようなものでしかない(文字としても認識できない)。

PCが事情を説明した場合、「そう言えば、前に吾野君がアフリカに存在する少数民族の言葉について、質問してきたな。そういったものかね？」と椅子を立てて部屋の中の資料を漁り始める。

資料を確認しながら教授はPCの質問に答えるが、彼は事件に対する情報を持っていない。

誠一については才能があったが言語学者になるのには興味がなく、大学時代から親の遺産で遊んでいたこともあり、あまり期待はしていなかったが今回のようなことになって残念だと言う。

誠一が質問してきた内容は名も無い少数民族の言葉の意味だったが、正確には分からなかった(そもそも、サンプルすら無いのだ)。

ただ、彼ら独自の信仰に関する意味を持っていると思われたが、未開の民族特有の原始的な野蛮さではなく、ひどく不穏な、人の精神の深層に触れるような邪悪な内容ではないかと危惧して、深入りはしなかったと言う。

「ああ、あったこれだ」

『アントライオン』の2階で聞いた言葉が蘇る。

教授はぼそぼそと呟いているのにも関わらず、耳元で囁かれるよう明瞭にその言葉が入ってくる。

例のメモに書かれている文字を読み取ることではできないのは相変わらずだが、そこに書かれている言葉の意味がはっきりと分かり、そしてそれが囁かれる言葉と一致したことを理解した。

いつの間にか部屋は暗く陰ったように、唯一の窓から黒い光が差し込んでいた。外には黒い太陽が輝いている。

黒い影が教授と重なりあっており、そいつが教授の口を動かしているように思える。その黒い影を背負った教授が静かに部屋を出て行った後、どこからか麗の悲鳴が聞こえた。

三度、『支配の呪文』に接することによって、狂気の深度3.受容に到達する。何が起きているのか

理解が始まり、この場では呪文自体をはっきりと聞き分けたいうえに、何が起こったかを認識する。

部屋の外に出ると窓が開いており、その下に教授が倒れているのが分かる。

3階から頭を下に落下しており、教授は首の骨を折って死亡している。

廊下にはお盆を取り落としてお茶をこぼした麗がへたり込んでいる。彼女の目の前で教授は窓から飛び降りたのだ。

大学は騒ぎになると同時に、警察が呼ばれる。PC、真や麗は事情聴取を受けることになるが、事件にせよ事故にせよ、教授が自ら窓から飛び降りたことは学生たちが証言しており、それ以上のことにはならない。

大学にきた刑事が銀座の事件と同じ刑事であり、事件の経過をそれとなく伝えるなどもよいだろう(特に進展は無いが)。

警察の事情聴取はばらばらに行われる為、それが終わると麗はPCを避けるようにして自宅へ戻っていく。

<心理学>1LV：麗は一見、父親の突然の自殺に動揺していたように見えるが、実際はそれほどでもないのではない。何か他の心配事に心を囚われているように見える。

再び銀座

この場面は特に銀座ということは想定していないが、淀川美乃、能代教授が死亡した後にPCが一息入れる、情報を整理しようと落ち着いた場所へ移動したところで起こる。

あるいは活動的なPCが休まない場合は、どこで起こってもよい。

銀座の『アントライオン』でコーヒーを飲んでいると(『アントライオン』は昔ながらのカフェで、コーヒーも酒類も軽食も出る)、表が騒がしくなる。

表に出ると、そこは太陽が黒く輝いていた。

蠢く人々は影のように黒く浮き出ており、表情の良く見えない顔は口元以外が暗黒のように見える。皆が皆、こちらを嘲笑しているように思えた。

遠巻きにする人々の中心に、栄和真示が暴れている。彼の周りにはより濃い影がわだかまっており、まるでそれに操られるように無意味な言葉と、切れ切れに『支配の呪文』を口走っていた。

幻覚の深度3.ファンタズムが適用されており、PCには黒い太陽と栄和真示を操る黒い影がはっきりと見えるようになる。

狂気に陥っていない人間には、栄和真示が血走った目で意味を成さない言葉を呟きながら暴れているようにしか見えない(もちろん、太陽が黒いこともない)。

真示はPCを見つけると、問答無用で襲い掛かってくる。

栄和真示：

<白兵>2LV ※素手による攻撃

<敏捷>2LV

<負傷>3LV

この遭遇によってPCは狂気の震度4. 適応に導かれる。

PLや、ここまでの展開によって犯人が麗であることに思い至っていない可能性がある。

その場合、GMはこの場で九鬼真が事件の真相を察して、麗が犯人であることを指摘してもよい。

真の言葉も通常の状態では聞けばただの妄想だが、もはやPCに疑う余地はない。

GMの判断によっては、そのまま探索を続けて真を最後の犠牲者にするのもよい。麗が最後の犠牲者として真を『暗黒の太陽』に捧げたのだ。

終幕部：『暗黒の太陽』

終幕部において主な選択肢は以下の通りになる。

PCの選択によってこれらを複合するか、GMはそれに沿うようにシナリオを改変するのもよいだろう。

能代麗と対峙する

麗が犯人であることを悟ったPCが彼女と対峙する場合である。GMの判断で、銀座で栄和真示と対決した後に、彼女が自ら姿を現してもよいだろう。

麗は基本的に早稲田大学の近くにある能代の自宅に居るか、能代享が死亡していなければ昼間は早稲田大学で父親の手伝いをしている。

PCが麗を説得などしようとしても無駄だ。彼女は完全に『黒き民』に堕して、その精神は『暗黒の太陽』のものとなっており、もはや助ける術はない。

彼女は『暗黒の太陽』に命じられるまま、PCに襲い掛かってくるが、犠牲者が5人以上(吾野誠一、矢作亜哉子、淀川美乃、能代享、栄和真示、九鬼真のうち5人)に達している場合、十分に資格を満たした彼女の身体に『暗黒の太陽』が降臨する。

どちらにせよ、麗の殺意は全開である。この為、PCが積極的に行動しない場合、彼女は常に先手を取ることになる。

『黒き民』能代麗：

<白兵>3LV ※素手に『暗黒の太陽』の加護が宿っている。

<敏捷>2LV

<負傷>3LV

条件を満たして、麗に『暗黒の太陽』が降臨した場合、以下の描写を行う。

能代麗の身体が膨張を始めた。ぶよぶよとした肉が彼女の着ていたものを押し破りつつ、巨大化を続けるが、頭だけはその身体に埋没していく。

その頭があった所と、両掌が内部から裂けて、いやらしい肉髷の穴が開き、巨大な歯が並んでいく。

貴方達が呆然とその様子を眺める中、そいつの肌は大きな息遣いとともに闇に浮くように異様に白く輝き、その体は溶けかかった蠟人形の巨人を思わせる忌まわしき人外の存在と成り果てていた。

その姿は、彫像に似ていない。

『暗黒の太陽』能代麗：

<白兵>5LV ※巨大な手の口が噛み付く。

<敏捷>1LV

『暗黒の太陽』の彫像を破壊する

彫像を破壊した場合、それを依代としていた『暗黒の太陽』は、一時的だがその場から退散する。

能代麗は『暗黒の太陽』との接続が途切れてその支配を脱するが、かの神への依存度が高くなっている為、精神へ致命的なダメージを受ける。同時に正気に戻り、自身の行いを正確に認識してしまう。

彼女は完全に正気を失い、脳病院へと入院して二度と元に戻ることなく一生を終える。

唯一の救いは、彼女が自身の犯行を告白するなどしても、正常な精神の持ち主からはただの妄想以上には認識されず、事件の物理的な証拠もない為に、犯罪者扱いにはならないことだけだ。

PCが自ら『支配の呪文』を唱える

狂気が深度4.適応にまで達している場合、PC自ら『支配の呪文』を唱えることが出来る。

それを行った場合、対象のNPC(GMの判断によってはPCにも)に望む行動を取らせることが出来る。犯人である麗を自殺させることなども可能だ。

だが、『支配の呪文』を唱えたPCは『暗黒の太陽』の下僕である『黒き民』となり果てる。

そのPCは麗の代わりに『暗黒の太陽』への供物を捧げる存在となり、己の欲望に従って生きるようになる。

GMの判断にもよるが、該当のPCはNPC化すると思えばよいだろう。

『暗黒の太陽』が降臨する

PCの狂気が深度4.適応に到達し、『支配の呪文』を自ら唱えた上に、PC、NPCを問わずに殺害するなどの悪意ある、恐怖をもたらす行動を取った場合、GMの判断によって『暗黒の太陽』がそのPCに降臨する。

この段階に達すると『黒き民』としての自らの意志も消し飛び、ただ『暗黒の太陽』の現世の活動の傀儡となり果てる。

該当のPCはNPC化し、完全にPLのコントロールから離れて、GMが自由に処理してよい。

能代麗を放置する

真を含めた犠牲者が出た後、PCが麗を犯人と認識していないか、あるいは対峙することを避けた場合である。

彼女は関係者全員を殺害した後、本格的に『暗黒の太陽』の信奉者としての活動を開始する。

人々に墮落と恐怖をもたらす為に、単純な通り魔的な犯罪と、『黒き民』を増やす為に新たな相手を求め始める。

これらはシナリオ内では語られないが、銀座周辺で矢作亜哉子亡き後、新たな女王と思われる女性が麗であること、帝都で売春や麻薬など中心とした組織的な活動がはびこるようにあったことなどを伝えるとよいだろう。

事件の後

事件は麗の死、あるいは活動停止によって終幕を迎える。

PCの行動によるが、事件はクトゥルフ神話的な事象が引き起こしたものであり、物理的な証拠は無い。この為、しばらくは事件に関わったPCは警察から監視対象となるが、それ以上のことには巻き込まれない。

PCに事件に遭遇、解決(あるいは、未解決)したことを踏まえて、その後をそれぞれ語らせるとよいだろう。

PCが、麗が犯人であることが分からず、彼女を放置した場合はいずれ再び同様の事件に巡り合うかもしれない。

参考資料、その他

本シナリオで主に参照した資料等を記載する。

- アフリカの太陽、たがみよしひさ、徳間書店
- グラーキの黙示録2 サウザンブックス社
『コールド・プリント』ラムジー・キャンベル、森瀬繚訳
- ラブクラフト・ミステリーTRPG Kutulu
日本公式：<https://kutulu.jp/>
- 『大正略字』フォント
表紙に使用している『大正略字』フォントは以下の URL よりダウンロード可能。
<https://booth.pm/ja/items/363104>
※フリーなのでぜひ、ご活用を！
- 帝都モノガタリ
<http://fgate.cyber-ninja.jp/index.html>

あとがき

こちら長い期間腹持ちしていたネタ、たがみよしひさ先生の『アフリカの太陽』が元ネタのシナリオです。

Kutulu の勝手が分からないので、実際のテストプレイでもプレイヤーに悟られないように「？」を浮かべながら、ついでにいろいろとぶっちゃけながらプレイしてしまいましたが、まあ、大きな問題は無かったのでよいかと。

Kutulu は癖がある、というよりも最近流行(?)の OSR なヤツなので、そもそも OSR な感じで話しまくるタイプのやり方が正しいのでは、とか思っています。

奥付

発行日：初版 令和4年8月7日

発行：F.G./龍門亭 EDO-RAM(Twitter:@EDO_RAMv200)